

## 松花和歌集卷第六以下の零本（紹介と翻刻）

福田 秀一

### 要 旨

鎌倉末期の二条派の私撰集と見られる「松花和歌集」については、先年当館に入った巻四（冬部）を本誌第四号に紹介・翻刻したが、丁度その折、巻六以下の一軸が古書肆に出て、久曾神昇氏の所蔵に帰した。今回氏の特別な御厚意でその全文の調査・翻刻を許されたので、ここにその本文を紹介し、併せて書誌的・本文的に必要な解説及び小考と初二句索引とを付した。

なお、筆者はさきに作成した「統現集・臨永・松花三集作者索引」を巻四の新出歌等に関して増補訂正して公にする旨、本誌第四号の拙稿の「要旨」に予告したが、その直後に右の一軸が出現したので、その本文を調査し得るまで増訂版の公表を控えてきた。それは本誌次号に掲載の予定である。

## 一、はじめに・書誌

先年筆者は、当館の所蔵に帰した「松花和歌集」の巻四(冬部)について本誌第四号(昭五三・三)に紹介と翻刻を行ったが、丁度その頃同集の他の部分が零本として出現した。『思文閣墨蹟資料目録』第七十五号(昭五三・三)に「19松花和歌集」と見えるもので、久曾神昇氏が入手されたことを、直後に知った。そこで同氏に、早速学界に御紹介下さるか、あるいは拝見・調査を許されるようお願いしていたところ、後にもふれるように当初は御自身で発表なさる御心算のようでもあったが、今年(昭和五十七年)に入って原本をお貸し下さり、筆者に撮影・翻刻をもお許し下さったので、先年来の経緯からここにその紹介と小考を試みる次第である。

「松花和歌集」巻六以下の零本と見られる本書は、卷子本一軸で、表紙は絹子、澗金色地に焦茶色網代模様、縦二七・〇糎横二四・五糎。見返しは鳥の子に金銀で雲霞を描く。本文は楮紙で、二六・八×約二〇・〇糎の料紙一八枚継ぎ。その後に二枚の白紙を付し、計二〇枚。全長約四・一米。現在は卷子本であるが、元来は一面一二行の冊子であったことが明かで、その点当館蔵巻四と共通するが、更に仔細に調査すると、料紙の寸法や字高がほぼ一致するだけでなく、筆蹟も第四・五紙を除き巻四と同一である。すなわち、この久曾神氏所蔵の一軸は、当館所蔵の巻四と連れである(この点の認定に当っては、高田信敬氏の助力を得た)。書写年時は、別筆の第四・五紙を含めて室町後期と見られ、従って当館蔵巻四も『思文閣古筆資料目録』第八十七号に「江戸初期筆写」とあるが、同期の写である。

なお、久曾神氏蔵本の載った『思文閣墨蹟資料目録』第七十五号には「卷子仕立箱入」(傍点引用者)とあり、また注

記のような形で「松花堂昭乗」と頭書してその略歴を記しているが、本書と松花堂との関係については特に説いていない。もちろん本書を松花堂筆と言うのでもない。恐らく後に引く端作りの題名から参考までに挙げたもので、この時点では特に伝承筆者を有していなかったように思われる。ところが久曾神氏自身の筆蹟と見られる箱書には「傳正廣筆松花和歌集零本」とある。伝正広筆というのはどこから来たのか、目下未詳である。

## 二、内 容

久曾神氏蔵本の書誌は概略以上の如くで、またその本文は具体的には後に翻刻する通りであるが、ここで若干の要点を述べておく。

先ず、冒頭は「松花和歌集卷第六／恋哥下」と端作りして、次行から詞書・作者名及び歌（一首一行）を記す。この形式は当館蔵卷四と全く同一である。従って久曾神本の少くとも冒頭は卷六（恋下）であり、また現在発見されていない巻五が「恋哥上」であったことも明らかである（そのことは第三節に挙げた③で一層明らかになる）。

ところで、本文が書写されている料紙一八枚のうち第四・五紙の二枚が他と別筆であることは前述した。それと冊子改装という点とから考えれば、現在の本文には錯簡があると見るのが至当である。すなわち、現存本の料紙の順序には不審がある。

そう思って改めて料紙の継ぎ目に注意し、その前後の本文（詞書と歌）の続き具合を見ると、現状が明かに非と分る箇所がいくつかある。△一五―一六▽（第一五紙と第一六紙との継ぎ目をこのように略記する。以下同じ）と△一七―一八▽はその最も顕著なものであるが、△一八―一九▽△二一―二二▽も、詞書と歌とが合っておらず、元来続いていなか

ったものと考えられる。また上述の筆蹟から△三―四▽及び△五―六▽も続いていたとは考えられず、その他にもう一つ、△一〇―一一▽も元来続いていなかったと思われる。五一番歌の詞書に「題しらす」とあって、五七番歌に再び「題しらす」とあるのは不必要だからである。以上少くとも七箇所は現状が非であり、後掲の翻刻においてはそこに○印を挿入しておいた。その中で、本文の復元に関して推測の可能な箇所にはその旨を注記した。

因みに、右の七箇所以外の継ぎ目はどうかと言うと、△六―七▽だけは「続後拾遺集」によって現状でよいということが積極的に証明されるが、それ以外は、目下のところ詞書・作者と歌との照応性や歌の排列しか手がかりはない。従って決定的なことは言えないが、筆者としては現状でよからうと思っている。

ところで、冒頭から第八紙までは恋の歌であるが、第九紙以下は雑の歌である。すなわち巻六(恋下)は後半を、雑部(巻七もしくは八以下)はその少くとも冒頭部を、それぞれ失ったことが明かである。それと第四・五紙が恋部にあって別筆である点から考えれば、この二枚はあるいは巻五(恋上)であったかも知れない。島津忠夫氏が『和歌文学研究』第十四号(昭三七・一〇)に翻刻されたのが巻五の全文だとすると、そこに見えないこの二枚の部分は巻五でないことになるが、例えば「寄鳥恋」の詞書は今回の三五番歌と四四番歌の次とに見えて(歌は欠けている)島津氏紹介の巻五の二四番歌にも見え、従来巻五と思われていた部分も、果してその全部であるか、途中あるいは末尾に欠脱がないか、再点検が必要かも知れない。

一方、第九紙以下の雑部について見ると、第九・一〇―(この間非連続)―一一・一四・一五紙は述懐歌、第二二・一六・一七紙は旅歌、第一三紙はその両方(旅―述懐の順)、そして第一八紙は山家の歌となっている。そこでこの部分の順序を考えると、第一八紙を暫く措けば、第一三紙を中間に置いてその前に第一六・一七・一二紙の旅歌(第二七紙の次に第二二紙が来ることは、詞書から分る)、その後第一〇・一一・一四・一五紙の述懐歌が来ると考えられる。山

家の第一八紙は、「臨永集」巻十(雑下)の構造を参照すると、それらより前であったかも知れない。そして全体は、こ  
れまた「松花集」が「臨永集」と同様な構成になっていたとすれば、雑下(巻八又は九か)の一卷の中ということにな  
る。但し、これはあくまで仮定の推測である。

なお、本書のこうした錯簡・脱落については、久曾神氏自身入手直後から気づいておられた。初めにふれた、当時学界への御紹介もしくは拝見を希望する旨筆者が申出た折の御返信(昭和五十四年五月二十一日付)に、「松花集は、冊子本を卷子に改めたものですが、残簡を卷子にした為、順序が乱れているらしく、つづかない所もあるので、折を見て順序を正してから公表する方がよいと考え、まだ順序の調査がついていない段階です」とある。また今般お貸し下さった時には、箱の中に氏の筆蹟で

雜	恋
続後拾 9	1
続後拾 10	2
新千載	3
続後拾	5
続後拾 13	4
新後拾 14	6
15	7
11	8
18	
16	
17	
12	

と記された紙片が入っていた。この数字は第何紙ということ、久曾神氏の復元案はこれによって推察することができるが、公表された説ではなく、メモに過ぎないので、これを論評するのは失礼であろう。ただ筆者としては、「別筆」の注記はもちろん、「18 16 17 12」の順序の推定などにおいて、氏と見解を同じくすることを光榮に思うものである。そして重ねて、このように途中まで調査を手がけられた資料の公開を筆者に許された学恩に深く感謝するものである。

### 三、下田屋切・松花集切について

こうして現在、「松花集」の本文としては卷一(春)・四(冬)・五(恋上)・六(恋下)の全部もしくはかなりの部分と卷七以下(雜)の一部、それにすでに久曾神氏が「私撰集と古写断簡の意義」(『国語と国文学』昭四六・四)に紹介された若干の断簡が知られているわけであるが、このほかにも手鑑などに見える古筆切で「松花集」の断簡と見られるものがある。「下田屋切」・「松花集切」の二種である。この中、一層確実度の高い「下田屋切」の方から先に述べる。

「下田屋切」は兼空上人(北畠師重子、風雅集初出)を伝承筆者とし、「古筆切索引稿——既刊古筆手鑑篇——」(国文学研究資料館文献資料部『調査研究報告』第二号、昭五六・三)には「慶安手鑑」(刊本)所載のものほか、「翰墨城」と「見ぬ世の友」とにそれぞれ見えるものを挙げている。この中、「翰墨城」所収の一片は「河海抄」(蜻蛉)の一節であるが、「見ぬ世の友」の一片(『古筆大辞典』に図版を載せる)は、「松花集」卷一の断簡である。複製本によれば二四・六×一五・九厘の由で、本文は次の如くである(歌頭番号は今私に付した)。複製本の解説に言うように、「増補古筆名葉集」の「兼空上人真光院 頓阿門人」の条に「四半 哥書ヌキ書哥二行書」と記するのがこれに該当するのであらう。

#### (1) 「見ぬ世の友」所収下田屋切

付1 そらものとかにかすむ春哉

題しらす 前中納言有忠卿

付2 はるきぬとそらにしられてあさかやま

みねよりかすむかけものとけし

前のうちのおほいまうちきみ

付3 あさな／＼とをさかりゆくやまのはゝ

いくへかすみのたちかさぬらん

前大納言為世卿

付4 あまを船こきゆくなみのうへよりも

猶あとなきはかすみなりけり

（注、第二首の二句、複製本の釈文には「そらにしくれて」とあるが、今改めた）

これは、早く安井久善氏が内閣文庫本「賜芦拾葉」巻四十所収本によって紹介された巻一（春歌）の八番歌下句から  
一番歌までに一致し、「下田屋切」と称されるものの中には「松花集」の断簡もあることが分る。

実はそのことは、すでに久曾神昇氏が前記「私撰集と古写断簡の意義」で指摘されたところであるが、その後  
に知られた断簡としては、藤井隆氏が「鎌倉時代書写和歌古筆切管見」（『愛知大学国文学』第十七号、昭五二・三）に右「見ぬ  
世の友」所収のものと共に報告された氏自身の所蔵一葉（二三・三×一四・八厘）がある。寸法や歌の作者から見ても  
本集の断簡に違いなく、その巻二（夏部）と考えられる。氏の翻刻によれば次の三首である。

(2) 藤井隆氏蔵下田屋切

惟宗光吉朝臣

付5 一声のなこりにあかてほととぎす

またれしよりもあかしかねつゝ

平英時

付6 ほゝときすなひとこゑをかこつ覧

きかてもたへてまぢし心に

よみ人しらす

付7 ほととぎすこゝろつくしのひと声を

このまの月にまぢいてつる哉

以上のほかにもう一葉、「下田屋切」と称されているか否かは不明であるが、濱口博章氏から某所にありとして教示されたものがある。極札には「兼空上人松花和歌三代集作者（宗門印）」とある由で、写真を「見ぬ世の友」の複製と比較すると、直ちに同筆か否か判定しかねるが、筆勢は通うようである。一葉一〇行、一首二行である点も前出二葉の「下田屋切」と共通する。本文は次の如く巻五（恋上）冒頭で、かつて島津忠夫氏が福岡住吉神社本によって紹介された同巻の三番歌の上句までである。

(3) 某所蔵下田屋切（？）

松花和歌集巻第五

恋哥上

題しらす 新院御製

付8 こひしともうしともわかすよもすから

ねられぬ袖にかゝるなみたは

藤原為親朝臣

付9 おもひたつわかころもての露けさに

つらきみちとはいまよりそしる

入道親王尊

付10 いのちにもかへはかふへきあふことを

以上のほか、久曾神氏が前記論攻で紹介された「松花集」の断簡六葉のうち、「徳川美術館蔵一号手鑑中のもの」以外の五葉も、氏の行文においては「下田屋切」であるように読みとれる。念のためにそれらの所蔵者名もしくはそれに代るものを、氏の付された符号と共に列挙すれば、A 徳川美術館蔵（巻四冬、冒頭一〇行、但し『古筆大辞典』はこれを次に述べる「松花集切」としている）、B 旧錦囊（秋、一〇行）、C 横浜某氏蔵（恋下、一〇行）、D 京都中野氏蔵（恋下、六行）、E 横浜某氏蔵（恋下？、九行）、である。

右に述べた「下田屋切」は、久曾神氏の紹介の A C D（既出の巻四もしくは巻六に一致する本文を有する）を暫く別としても、(1)そして恐らく(3)によって、「松花集」の断簡と確認し得るが、これと別に「松花集切」と称される古筆切がある（この点については高田信敬氏に示唆を受けた）。後掲古筆手鑑複製類の解説などにも言うように、「増補古筆名葉

集」の淨弁の条に「松花集切 自撰卷物哥二行書」とあり、前記「古筆切索引稿」によれば、「見ぬ世の友」「藻塩草」「翰墨城」に各一葉、計三葉が複製されているが、淨弁の筆かどうかという点については、「見ぬ世の友」と「藻塩草」との解説は前田育徳会の「宝積経要品」紙背の短冊と比較して同筆と認められないと言ひ、「翰墨城」の解説のみが（同短冊には触れずに、中村記念館蔵の「手鑑」に収める「和歌懐紙」などと比較して、淨弁の自筆と認めることができると言っているが、その「和歌懐紙」を見ていない筆者には、どちらの見方が当たっているとも言ふことができず残念である。

しかしともかく、右三手鑑に見られる「松花集切」の本文や寸法は、各複製本によれば次の如くである。

(4)「見ぬ世の友」所収松花集切（二五・一×七・七厘）

離別の心を

大納言師賢卿

付11 命たにあらはとたのむわかれちの

ほとは雲井にのこる月かけ

(5)「藻塩草」所収松花集切（二五・四×一六・四厘）

従一位定房卿

付12 いはしみつかみよのさくらうつしもて

花のかゝみのかけそくもらぬ

中納言公明卿

付13

おとこ山みねのさくとも色そへよ

みゆかみゆかさなる春のしるしに

藤原為冬朝臣

付14

おりしもあれ君かたむけと神かきに

さきてそかゝる花のしらゆふ

（注、第一首の作者名は推定による判読。第二首の四句は「みゆきかさなる」の誤写か）

(6)「翰墨城」所収松花集切

釈教哥

蘇悉地経此経根本真言威徳既

勝といへることを

入道親王尊

付15

猶ふかくたつねてそしるこのよには

かきもつくさぬ水くきのあと

真言教に内証は忘念もへたて

なく身に紡しては断悪修善す

へしといふ心をよめる

## よみ人しらす

以上が現在複製本で見ることのできる「松花集切」の全文で、これらの中には、「下田屋切」の場合と違って、「松花集」の既知部分と重なるものはない。また、各巻の端作りも含まれていないので、これらが「松花集」の断簡であると積極的に証明するのは、これだけでは困難である。

ただここに、さきに言及した久曾神氏紹介の徳川美術館蔵一号手鑑所収の一葉がある。これは、氏の行文においては「松花集切」であるように読めるのであるが(但し「古筆大辞典」はこの一葉のことには言及せず、「松花集切」の項に前記巻四冒頭の一〇行を説いていることは前述。因みに同項は図版としては前掲(4)を掲げている)、その内容は本集の巻一の冒頭(端作りを含む)七行である。従って、この一葉が(4)と(6)と同筆すなわち「松花集切」に誤ないならば、同切もまた「松花集」の断簡であることは確実となるが、筆者は徳川美術館の二葉のどちらをも見ていないので、慎重を期するならば、今はそれ以上は言えないことになる。

しかしながら敢えて言えば、今の筆者は、(4)と(6)についても伝承通り「松花集」の断簡と見てよいと思っている。その第一は、右三葉の部立がそれぞれ離別(広く「雑」あるいは「羈旅」であったかも知れない)・神祇・釈教と考えられることで(「釈教」はその旨首書されている)、付11と付15の歌が既知の巻に見当らないことは至極当然だからである。「藻塩草」の一葉(付12と付14)はあるいは春部の断簡と思われるかも知れないが、神祇歌の要素(歌句・歌意)がこう連続していれば神祇部と見るのが至当で、既知の巻一と重ならないことは怪しむに足りない。

第二には、付15の「よみ人しらす」を別として、作者がすべて「松花集」の作者であり、かつ官位表記も全員「松花集」の既知本文と一致することである。付13の公明については、巻一には「権中納言公明卿」とあるが、巻四には

「中納言公明卿」とあり、「松花集」とほぼ同時に成立したと見られる「臨永集」にも「中納言公明卿」とあるので、卷一（内閣文庫本）の「権中納言」には誤写の疑もある（公明は本集が成立したと見られる元徳三年の前年二月に権中納言から正に転じているから、あるいは集中での不統一かも知れない）。

そして最後に、こうした佚文を有する集が今のところ他に思い浮かばないからである（無論その前に『国歌大観』と『新校群書類従索引』は引いてみたが、これらの索引には一首も出てこない）。右に公明について一言したように、「松花集切」の作者名表記は「臨永集」にも一致するのであるが、同集には神祇部（巻五）が独立している他、離別・釈教の歌群も見える（共に巻十・雑下）にも拘らず、右の歌はそこに見えない。従ってこれらは同集の切でないことは明らかである。

以上の理由で、消極的ながらこれらは「松花集」の佚文と見なしておきたいと思うのであるが、そうすると本集の成立・構成や伝来に関して、いくつかの事実が問題になり、あるいは推測される。

第一は「松花集切」が浄弁を伝承筆者とし、「古筆名葉集」には「自撰巻物」（傍点私意）とまであることである。同集が浄弁の撰ではないかということは、巻五を紹介された島津氏が賜芦拾葉本（巻二）の識語の一節（より詳しく言えば奥書の前半）を考慮して推測を試みられ、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究南北朝期』三二二頁）もいくらか同意に傾いておられるようであるが、「松花集切」に関する前述の伝承は、その推測に一つの状況証拠を加えるものとも言えよう。もっとも、ここで言う賜芦拾葉本の識語なるものが「古筆了佐鑑定奥書云」と首書するものであるから、「古筆名葉集」などと根拠は一つで、新たな証拠とは言えないかも知れないが。

第二には、本集の部立について、一つの事実が推測される。「釈教」が一つの部立を構成しつつ、かつ一卷をなしてはおらず、神祇歌あるいは雑歌と共に一卷を構成して、その後半に位置していたことである。神祇歌と共に一卷

（巻十か）をなしていたのではないかと思うが、雑歌（その場合は「雑歌下」か）と共であつたかも知れない。本節の冒頭にも仄かしたように、本集の巻六までは四季と恋であつたことが明かであるのに対して、巻七以下の部立は確かでないからである。それにしても、全体が十巻であつたことは、例えば釈教部が独立して一巻を占めていないことから言えるのではなからうか（全二十巻であつたと見られる「統現葉集」では、神祇歌と釈教歌とが各一巻を占めている）。今後巻七以下の断簡が、特に各巻の冒頭を有するものが現れるよう切望する。

第三は、本集が南北朝期頃に少くとも二度にわたつて書写されたらしいことである。「松花集切」の筆者や同集の撰者が浄弁であるにせよないにせよ、同切がもしも原本の断簡であるならば、南北朝期頃の転写と知られるのは「下田屋切」の一回のみとなるが、それにも本集がかなり早く転写されていることは、同時代の「臨永集」に伝後光厳院筆本（日本古典文学影印叢刊所収）が伝存することなどと共に、二条派撰集の南北朝期における受容や伝来を考えさせる上に一つの資料となるものである。

#### 四、巻六以下の翻刻

さて、次に久曾神氏藏巻六以下の一軸の本文を現状によつて翻刻し、必要な注記を付しておく。翻刻・注記の方針はかつて巻四や「人家和歌集」（巻八・十）を本誌（第四号及び第七号）に翻刻した時と全く同じであるから、改めて繰返さない。

松花和歌集卷第六

恋 哥 下

待恋を

今出川院近衛

一 うらみても猶たのむかなわひぬれはいまはたおなし人の契を

中務卿尊親王

二 たのめをく露のなさけのことはに命をかけて待もはかなし

前大納言実教卿

三 深くもさのみは何かつらからむこぬをならひにおもひこりなは

元亨三年八月十五夜龜山殿月五十首に

権中納言為定卿

四 なかめわひぬこぬ人つらきよなくの涙はかりをさそふ月影

内裏にて五首哥講せられ侍ける時月前恋」一

権中納言具行卿

五 なをさりにまたれしまてや月みるもなくさむよはの思ひ成けん

おなし心を

平英時

六 月影のふけぬる後も偽にならはぬほとは猶そまたるゝ

紀俊文

七 待人のこぬ夜のかすはわか袖の涙にやとる月もしるらむ

恋の哥の中に

女藏人万代

八せてたゝうきなくさめもまたれけりこぬよあまたのつらさ忘て

藤原基夏

九偽もまたならはねはよひのまのかねより後もなをまたれつゝ

浄観法師俗名多々良重俊

一〇待人はこぬみのはまのさ夜千鳥いかなる方にとをさかるらん」二

前権僧正慈慶

一一さりととも待夜明ゆく鳥のねに聞きためぬる人のいつはり

近恋といふことを

丹波忠守朝臣

一二あしかきのひまもあらはとまとるゝやまちかきなかのたのみなるらん

リ 一二歌一五上句―横浜某氏蔵下田屋切ニア

題しらす

よみ人しらす

一三身のうきを思ひしらするつらさにいとひははてぬ心ともかな

従二位隆教卿

一四いつまでといける命そなからへてあらはとたにもいはぬ契に

津守国守\*

\* 横浜某氏蔵下田屋切ニ「夏」トアル由、是カ

一五契しそいとゝ跡なきうき人のかくれのをのゝもすの草くき

為道朝臣女」三

○

一六 よしさらはあふにはかへし同世になからへてこそ後もたのまめ

（ママ）  
万愁門院

一七 今夜たにかゝる涙の手枕に人の袖さへくちぬへきかな

兵部卿邦親王

一八 絶はてはこれや形見としのはれんともに見るよの袖の月影

今上御製

一九 恋くゝてあふのまつ原こよひたにかくても千代をつくさましかは

法親王承

二〇 かねてより思別のかなしさに鳥のねまたぬ我なみたかな

為道朝臣女

二一 さ夜衣へたてし中のうさよりもきてかへるにそ袖はぬれける

尾張重遠

二二 別ちのつらさはかねてしられけりかならす鳥のこゑならねとも「四

権少僧都浄道

二三 わかるへき時をはわれもしる物を猶いそけとや鳥のなくらん

後朝恋といふ事を

従三位藤子

二四 けさはなをほしこそわふれあふさかの関のし水に袖やぬれつる

元徳二年九月十三夜内裏にて三首哥講せ

られける時稀恋

二五 命たにつれなからすはそのまゝに又や待みぬ契ならまし

恋の哥の中に 宰相典侍

二六 いつまでかうつゝなりけむ思ひねの夢路ならてはまつ宵もなし

院御製

二七 名残なくわするゝ人はなになれやつきぬ恋する我もある世に

よみ人しらす」五

○

二八 いつよりか人の心のわすれ水下にかよひし道も絶けん

道意法師

二九 さらてたにつらき心のわすれくさ忍につけて茂る比哉

法印隆淵

三〇 名にたゝむ後のつらさをおもはすはしゐても人を猶やしたはん

平石時

三一 かはりゆく人はたのためぬ夕暮をとはれし時と何またるらん

平時英

二九作者ノ三〇歌―京都中野氏蔵下田屋切ニア  
リ

三三 あふことをせめて一夜とおもひしはなけかんための心也けり

宰相典侍

三三 ありはてぬ一よの夢の契ゆへなき思ひの身に残るらん

祝部成久宿祢」六

三四 忘るなよ又はつらさにかへるともあひ見しことの昔語を

三四—統後拾遺八五九

寄鳥恋といへる事を

達智門院

三五 うらみすよゆふ付鳥もおなし音に涙をそへしかたみと思へは

\* 鳥—本文ニ小丸印ヲ打チ右ニ補フ

達智門院兵衛督

三六 もろともにいとひしよはの鳥の音をひとりね覚に聞そかなしき

逢不遇恋を

弾正尹忠親王

三七 かきりともいはぬはかりをたのみにて遠さかり行とし月そうき

\* たのみ—「かたみ」ヲ見セ消チニテ改ム

藤原盛徳

三八 契らすはかはる心もつからし見しよはかりを思いてにして

春宮大夫公宗卿」七

三九 我はかりおもひもたゝぬ心にてせめても人を猶やたのまむ

絶恋を

万秋門院

四〇 わかみたにうらみはてすはをのつから情みる世もあらし物を

新院御製

四一 この世には又あふましき中なれやありし一夜を思ひ出して

右近大將道教卿

四二 かれはてし人の契のことの葉に涙の露そ色もかはらぬ

為道朝臣女

四三 なかれてといかゝたのまむたえ／＼にうき中川の水の心を

平重雄

四四 遠さかる人の行ゑとおもふにはわか涙こそかたみなりけれ

寄鳥恋を

三善為連「八

○

四五 何ゆへのうきになしてかいとはまし一かたならすすみわふる身は

寄河述懐といへる事を

永福門院

四六 なかれてのすゑをもなにかたのむへきあすかのかはのあすしらぬよに

述懐を

兵部卿邦親王

四七 さり共と思ひなすにはなくさまでうきあらましにぬるゝ袖哉

大納言師賢卿

四六—永福門院百番自歌合九五番右  
\*の「た」ノ次ニ「ひ」ヲ書キ、見セ消チトス

四七—続後拾遺一一六七（邦省親王）

四八 かくしつゝたゝなをさりのあらましに行すゑしらぬ世をやつくさん

二品法親王 寛

四九 うれしきもつらきも老の涙にて世にふる袖はかはくまもなし

寄山述懐といへることを

関白<sup>\*</sup>さきの左のおほいまうち君」九

<sup>\*</sup>さきの「コノ三字右ニ小字補入

五〇 のほるへきみちはまよはし位山世ゝにかはらぬ跡をたつねて

題しらす

前参議為実卿

五一 おもへともかひもなきさにしつみにきいかにかせましわかのうら浪

藤原英頼

五二 人なみにたちよるわかのうら千鳥いかなるよにかあとをつけまし

宗像氏長

五三 ありとたにしられぬわかのうらちとりいかにきてか跡をのこさん

法印長舜

五四 立かへりわかにしへのこひしきや有しよりけにうき身なるらん

藤原重綱

五四—新千載二一九

五五 何事もむかしならはとしのはれて老のなみたそ袖にかはかぬ

源重泰」一〇

○

五六 捨はてしわか身と思ふに立かへり何と此世を又なけくらん

題しらす

本性法師

五七 いまゝてはなけかさらましむかしよりかゝるへき世と思ひしりせは

よみ人しらす

五八 いは<sup>(ママ)</sup>はかり猶なけかまし世中のうきをならひにおもひなさすは

五八―拾葉抄三九一(初句いかばかり)

聖悟法師

五九 いかにせむすてゝ住世とおもふたになをうき事は身に残りつゝ

遍正法師

六〇 わひぬれは身はいたつらにむもれ水行かたもなきよこそつられ<sup>\*</sup>けれ

\*よ―「身」ヲ見セ消チニテ改ム

除目のあした除書をみ侍けるにあまたの下

藁にこえられ侍りければよめる

藤原冬隆朝臣「二一

○

〔九二ノ次カラ続ク〕

六一 思ひやれわれのみたひにとしをへて人をみやこにくるへしとは

題しらす

道意法師

六二 草枕ね覺の床の露霜にみるよまれなるふるさとの夢

源高氏

六三 露にしほれ嵐になれて草枕たひねのとは夢そすくなき

惟宗忠秀

六四 思やる程をはるかにへたてゝも夢ちはちかきうつ山こえ

平貞宗

六五 末も猶遠きたひねの草枕夢にもあすの道いそく也

前中納言公修卿

六六 たひ衣かたしく床の思ひねは都のほかにもみる夢もなし

院御製「一二

六七 山風よ吹たにたゆめたひまくら都こひしみうちもねぬよに

法親王承

六八 都思かりねの庵のよるの雨もるにも過てぬるゝ袖かな

多々良貞弘\*

六九 たひ衣かたしく袖の露けさをいつか都の人にかたらん

藤原基明

七〇 をさゝ原よのうきことはしけゝれと思ひ出なる一ふしもなし

三善為連

七一 なからへて有はつましきことはりも世のうき時や思ひいつらん

浄観法師

\* 雨ーコノ次ニ「物」ヲ書キ、見セ消チトス

\* 貞ーコノ一字、初メ書キ落シ、小丸印ニテ右ニ補フ

\* うー初メ「こ」（不分明）ノ如キ字ヲ書キ、見セ消チトシテ右ニ「う」ヲ書ク

七二 さのみなとわかためつらき此世そとかつ知なからいとはさるらん

平時英<sup>\*</sup> 一三

<sup>\*</sup> 時英「初メ」英時「卜書キ、」時「ヲ見セ消チト  
シテ」英「ノ上ニ小丸印ニテ」時「ヲ補フ

七三 うきなからさても世にふるあま雲の立ぬにつけてぬるゝ袖かな

中原政宣

七四 のかれての後を誰かはきてとはん世にすむたにも数ならぬ身に

源高氏

七五 あらましに幾度すてゝいくたひか世には心の又うつるらむ

大僧都良聖

七六 さても世にあるへきものを中／＼にうき身をうしと思しらすは

祖月法師

七七 いまも猶世のうきことのかはらぬはいかにのかれしわか身なるらん

頓阿法師

七八 としもへぬいまひとしほと思ひしも心にくつるすみ染の袖

懐旧の心を

前中納言季雄<sup>(ママ)</sup> 一四

七九 遠さかる月日にそへて思出のなきもむかしはこひしかりける

本空法師

八〇 いにしへを思いつれはぬるかうちにみるより外の夢も有ける

運尋法師

七八―新後拾一三六八・草庵集一二四二

七六―統後拾遺一一九一（権少僧都良性、五句  
何思ふらむ）

八一 ぬるかうちにむかしをみつる夢ちこそうつゝより猶さたか也けれ

藤原行朝

八二 夢とのみ思ひしれ共こしかたの猶こひしきはね覚也けり

平重棟

八三 哀也いそちにかゝる老のなみたちもかへらて過しむかしは

山寺にこもりぬ侍けるころことのたよりありて

京なる人のもとに申つかはしける

法印長舜「一五

○

八四 みねの霧ふもとのゝへの夕露に涙かさねて袖そしほるゝ

前参議雅孝卿

源英嗣

八五 まきのはのしづくもほさてから衣すそのゝ露に又しほれつゝ

大納言師賢卿

八六 たひ人のいるのゝお花うちなひきたかた枕にむすひをきけん

院御製

八七 草枕むすひやせましやたのゝあさちわけいり此日くれなは

前大僧正慈勝

八八 露しけき山のした道分わひてやとふかたもあらしふくなり

元亨三年八月十五夜亀山殿にて人々題をさ

くりて哥をつかうまつりけるに旅」一六

前大納言実教卿

八九 もろともにおなし山路はこえつれとやとふ暮は行わかれつゝ

おなし心を

平英時

九〇 われよりもいとくみえて夕くれのやとふさとをすくるたひ人

権少僧都実性

九一 さきたちて過ぬとみつるたひ人もおなしとまりのやとをこそとへ

羈中雨といふ事を

公賀法師

九二 むらさめはわれより前に峯こえてふもとのつゆにぬるゝ袖哉

みやこのほかにとしひさしく住侍て後ひとのふる郷

へかへりけるによみてつかはしける

本空法師」一七

〔六一へ続く〕

○

少将内侍

九三 故郷にたへてもすまし面かけの残るむかしをしのはさりせは

元亨四年二月後宇多院にめされける石清

水の三首哥合に

前大納言為世卿

九四 雲ふかき軒はの山はくれやらて麓にめくるよとの川なみ

山家を

平守時朝臣女

九五 よ所にてはうき世のほかと聞しかとすめはかはらぬ山の奥哉

彈正尹忠親王

九六 山さにと何しか人のまたるらむとはれんとてかすまぬ物から

題しらす

二品法親王寛

九七 忘すよかさなる山の空晴てをさゝかたけに月をみしよは」一八

## 索引

今回翻刻した久曾神氏藏本九七首と「下田屋切」の一〇首、「松花集切」の五首計一二二首のうち、上句を欠く一首を除く一六首について、その初二句を歴史的仮名遣で表記して五十音順に排列し、歌頭の番号をもって示した。

あさなあさな	とほさかりゆく	付三	ありはてぬ	ひとよのゆめの	三三
あしかぎの	ひまもあらはと	一二	いかにせむ	すててすむよと	五九
あはれなり	いそちにかかる	八三	いかばかり	なほなけかまし	五八
あふことを	せめてひとよと	三二	いつはりも	またならはねは	九
あまをふね	こきゆくなみの	付四	いつまてか	うつつなりけむ	二六
あらましに	いくたひすてて	七五	いつまてと	いけるいのちそ	一四
ありとたに	しられぬわか	五三	いつよりか	ひとのころの	二八

いにしへを おもひいつれは  
 いのちたに あらはとたのむ  
 いのちたに つれなからすは  
 いのちにも かへはかふへき  
 いはしみつ かみよのさくら  
 いははかり なほなけかまし  
 いままては なけかさらまし  
 いまもなほ よのうきことの  
 うきながら さてもよにふる  
 うらみすよ ゆふつけとりも  
 うらみても なほたのむかな  
 うれしきも つらきもおいの  
 おもひたつ わかころもての  
 おもひやる ほとをはるかに  
 おもひやれ われのみたひに  
 おもへとも かひもなきさに  
 かきりとも いはぬはかりを  
 かくしつ つ たたなほさりの  
 かねてより おもふわかれの  
 かはりゆく ひとはたのめぬ  
 かれはてし ひとのちぎりの  
 くさまくら ねさめとのこの  
 くさまくら むすひやせまし  
 くもふかき のきはのやまは

八〇  
 付一  
 二五  
 付一〇  
 付一二  
 五八  
 七七  
 七三  
 三五  
 一  
 四九  
 付九  
 六四  
 六一  
 五一  
 三七  
 四八  
 二〇  
 三一  
 四二  
 六二  
 八七  
 九四

けさはなほ ほしこそわふれ  
 このよには またあふましき  
 こひこひて あふのまつはら  
 こひしとも うしともわかす  
 こよひたに かかるなみたの  
 さきたちて すきぬとみつる  
 さてもよに あるへきものを  
 さのみなど わかためつらき  
 さよころも へたてしなかの  
 さらてたに つらきころの  
 さりととも おもひなすには  
 さりととも まつよあけゆく  
 すてはてし わかみとおもふ  
 すゑもなほ とほきたひねの  
 せめてたた うきなくさめも  
 たえはては これやかたみの  
 たちかへり わかいにしへの  
 たのめおく つゆのなさけの  
 たひころも かたしくそての  
 たひころも かたしくこの  
 たひひとの いるのをはな  
 ちきらすは かはるころも  
 ちきりしそ いととあとなき  
 つきかけの ふけぬるのちも

二四  
 四一  
 一九  
 付八  
 一七  
 九一  
 七六  
 七二  
 二一  
 二九  
 四七  
 一一  
 五六  
 六五  
 八  
 一八  
 五四  
 二  
 六九  
 六六  
 八六  
 三八  
 一五  
 六

つゆしけき やまのしたみち  
 つゆにしほれ あらしになれて  
 としもへぬ いまひとしほと  
 とほさかる つきひとそへて  
 とほさかる ひとのゆくへと  
 なかめわひぬ こぬひとつらき  
 なからへて ありはつましき  
 なかれてと いかたのまむ  
 なかれての すゑをもなにか  
 なこりなく わするるひとは  
 なにことも むかしならはと  
 なにたたむ のちのつらさを  
 なにゆゑの うきになしてか  
 なほさりに またれしまてや  
 なほふかく たつねてそしる  
 ぬるかうちに むかしをみつる  
 のかれての のちはたれかは  
 のほるへき みちにまよはし  
 はるきぬと そらにしられて  
 ひとこゑの なこりにあかて  
 ひとなみに たちよるわかの  
 ふけゆくも さのみはなにか  
 ふるさとに たへてもすまし  
 ほとときす こころつくしの

八八  
 六三  
 七八  
 七九  
 四四  
 四  
 七一  
 四三  
 四六  
 二七  
 五五  
 三〇  
 四五  
 五  
 付一五  
 八一  
 七四  
 五〇  
 付二  
 付五  
 五二  
 三  
 九三  
 付七

松花和歌集卷第六以下の零本（紹介と翻刻）（福田）

ほととぎす	なとひとこゑを	付六
まぎのはの	しつくもほさて	八五
まつひとの	こぬよのかすは	七
まつひとは	こぬみのはまの	一〇
みねのきり	ふもとののへの	八四
みのうさを	おもひしらする	一三
みやこおもふ	かりねのいはの	六八
むらさめは	われよりまへに	九二
もろともに	いとひしよはの	三六
もろともに	おなしやまちは	八九
やまかせよ	ふぎたにたゆめ	六七
やまさにと	なにしかひとの	九六
ゆめとのみ	おもひしれとも	八二
よしさらは	あふにはかへし	一六
よそにては	うきよのほかと	九五
わかみにた	うらみはてすは	四〇
わかるへき	ときをはわれも	二三
わかれちの	つらさはかねて	二二
わするなよ	またはつらさに	三四
わすれすよ	かさなるやまの	九七
わひぬれは	みはいたつらに	六〇
われはかり	おもひもたたぬ	三九
われよりも	いそくとみえて	九〇
をささはら	よのうきことは	七〇

をとこやま  
みねのさくらも  
付一三  
をりしもあれ  
きみかたむけと  
付一四